文語歌曲

「冬の歌」作詞者未詳の歌三曲

谷田貝常夫

寒波にふるふる思ひの昨今ゆゑ、冬を主題とせる歌三曲を採上げたり。いづれも良き歌詩なれど、どれにても「作詞者未詳」となりをりたり。

冬の野　　作者未詳　獨逸曲

一、露霜の起き渡す、　冬の野べぞさびしき。
　八千草はうら枯れて、　啼(な)く蟲も聲立てず。
二、木枯の吹きすさぶ、　冬の野べそさびしき。
　木々の葉は散りはてて、飛ぶ鳥も行きなやむ。

「重音唱歌集〔一〕」明治三十三年

獨逸の原曲のいかなる歌詞かは不明なれど、おそらく冬の情景にはあらざること推測可能、別途に日本の冬景色を歌詞とし、その作者も不明なり。されど重音とて輪唱部分のうまく調和せることは、西洋音楽を咀嚼せる結果ならむ。日本にてはことばを朗誦するが音樂にて、そも共に同じ歌詞を同じ旋律にて唄ふ齊唱(せいしやう)・ユニゾンのみをこととす。

冬の夜　　文部省唱歌

一、燈火(ともしび)ちかく衣縫(きぬ)ふ母は／春の遊の樂しさ語る。
居竝ぶ子どもは指を折りつつ／日數かぞへて喜び勇む。
圍爐裏(ゐろり)火(び)はとろとろ　外は吹雪。
二、圍爐裏のはたに繩なふ父は／過ぎしいくさの手柄を語る。
居竝ぶ子どもはねむさ忘れて／耳を傾けこぶしを握る。
圍爐裏火はとろとろ　外は吹雪。

「尋常小学唱歌（三）」明治四十五年

冬景色

一、さ霧消ゆる湊江(みなとえ)の／舟に白し、朝の霜。
　ただ水鳥の聲はして／いまだ覺めず、岸の家。
二、烏啼きて木に高く、／人は畑(はた)に麥を踏む。
　げに小春日ののどけしや。／かへり咲きの花も見ゆ。
三、嵐吹きて雲は落ち、／時雨(しぐれ)降りて日は暮れぬ。
　若(も)し燈火の漏れ來ずば、それと分かじ、野邊(のべ)の里。

「尋常小学唱歌（五）」大正二年

「小春日」は、冬に暖き春のごとき日和なるをいふ。誤用多ければ一言

いづれも冬の情趣纏綿とせる良き唱歌なれど、三曲とも作詞者は不明なり。明治末年には唱歌の作詞作曲は外來の西洋音樂より離れて、大半が日本人のものとなれり。多くの著名なる學者などの動員

されて編輯委員となり、合議により樂曲決められたり。その際、作詞者と作曲者に大枚の報酬を拂ひてすべて匿名とし、口止め守らせて著作權を文部省の所屬とせり。かくて「文部省唱歌」なるもの生れたり。そが個人の著作權認められしは、敗戰後の占領軍の指示によるといふ。されど時すでに遲し、原作者の後追ひは困難をきはめて不明のままにをはる歌多しといふ。

この匿名方式、大なる問題を殘せり。文部省の歌詞改竄を容易にしたればなり。すでに敗戰直前に文部省、唱歌の名曲「春の小川」にある「さらさら流る」を、低學年生に文語體なるがけしからぬとの理由にて「さらさら行くよ」と變ふ。この書換へ、昭和天皇に「川は流れるもので、行くものではないのでは？」と皮肉られたることにて有名となりにたり。

文部省の、纖細なる日本語感覺の缺如は論外なれど、日本の歌の歴史においては、わらべ歌や民謠などからもわかる如く、「替へ歌」は重要なる役割擔ひたりと聲樂家の藍川由美氏指摘す。この事実、誰も幼き時の思ひ出に殘らざるか、戦争激しき中にても軍隊を皮肉れる替へ歌ありし。

替へ歌とならば作詞者の名前消ゆ。生前永六輔、スキヤキ・ソングの海外にての爆發的ヒットに自嘲氣味にいへり、「作曲者の中村八大にはどんどんお金がはひるのに、作詞者には何も來ない」と。そも音樂著作權なるもの、日本の文化傳統にはなかりしものなるを。

（平成三十年一月二十九日受附）